

第12期
「ピアニストのための
アンサンブル講座」(ピアノ伴奏法講座)
受講生決定!

2006年度より毎年開催している「ピアノ伴奏法講座」。第8期より講座名を「ピアニストのためのアンサンブル講座」と改め、よりアンサンブルを意識した講座としています。この度、第12期の受講生5名が決定しました。7/19(水)～2/11(日・祝)の修了記念コンサートまで、4名の講師の指導のもと、全10回の講座を行います。

受講生：五十嵐里佳、江村理沙、佐々木杏子、中田景子、宮永霞



聴講生随時募集中!

今期より一般¥1,000、22歳以下の方は無料です。ぜひご来場ください。

日程／
2017 ①7/19(水)、②20(木)、③9/2(土)、④3(日)、
⑤10/21(土)、⑥22(日)、⑦12/22(金)、⑧23(土・祝)、
2018 ⑨2/10(土)、⑩11(日・祝)

内容／
〈奇数回〉13:30～19:30 実技レッスン
〈偶数回〉10:00～19:30 アナリーゼ
講義～奏者の視点から～②⑥⑧
ピアノをめぐる音響を考える④
実技レッスン

①②は声楽&ヴィオラ、③④⑤⑥はヴァイオリン、⑦⑧は声楽&ヴィオラ、
⑨はすべて、⑩は修了記念コンサートを開催予定。

会場／静岡音楽館AOI ホール(8階)、講堂(7階)
講師／野平一郎(作曲家、ピアニスト、静岡音楽館AOI芸術監督)
漆原啓子(ヴァイオリン奏者)、川本嘉子(ヴィオラ奏者)、
寺谷千枝子(マソソプラノ歌手)
倉田尚彦(株式会社松尾楽器商会 調律師)*④講義講師

聴講料／一般：¥1,000

22歳以下：無料

10回通し券：一般¥9,000

第22回「静岡の名手たち」
オーディション合格者決定!

5/6(土)打楽器部門、声楽部門

5/7(日)弦楽器部門、アンサンブル部門

この度、第22回「静岡の名手たち」オーディションが行われ、応募総数48組から8組の方が合格しました。合格者のみなさんは9/16(土)第22回「静岡の名手たち」オーディション合格者によるコンサートに出演します。あなたも新しい才能が羽ばたく舞台にぜひ!

〔打楽器部門〕

小野陽史(スネアドラム)、
中野志保(マリンバ)

〔声楽部門〕

遠藤紗千(ソプラノ)、
カンティアーモ常葉[井上知美、太田裕香子、土屋由江、中野恵利、
中村美幸、西脇純子、林志織、増田千弥子、松山奈奈、山岸良美]
(声楽アンサンブル)

〔弦楽器部門〕

小川亜希子(ヴァイオリン)、
深澤太一(ギター)【コンチェルト賞】

〔アンサンブル部門〕

湯原好恵、新井瞭(ヴァイオリン、ピアノ)【ロダン賞】
上野由理、藤田麻貴子(2台ピアノ)

※各部門五十音順



第22回「静岡の名手たち」
オーディション合格者によるコンサート

9月16日(土)18:00 開演(17:30 開場)
全自由¥1,800(会員¥1,620、22歳以下¥1,000)
好評発売中



第21回「静岡の名手たち」オーディション合格者によるコンサート より

撮影：日置真光

午前中の講演もとても刺激的でした。本公演は芝居であるとともにコンサートでしたが、素晴らしい音楽でたし、
思い掛けない芝居の展開でした。いい公演でした。(4/29 「1940 ーリヒャルト・シュトラウスの家ー」ご来場者より)

ご来場誠にありがとうございました。おかげさまで公演はチケット完売となりました。通常のコンサートとは趣の異なる公演でしたが、
音楽がお好きな方々、演劇がお好きな方々、多くのお客様にご覧いただけたことは嬉しい限りでした。また、講演会も多くのお客様に
お越しいただきました。AOIでは公演をより楽しんでいただくため、公演前に講演会をご用意しているものもごさいます。ぜひご参加
ください。

AOI
コミュニケーション
ひろば
お客様の声

静岡音楽館倶楽部会員の皆さまへ

お名前、ご連絡先、銀行口座等、ご登録内容に変更が生じた場合は、速やかに
下記までご連絡ください。なお、平成29年度をもって退会をご希望のかたは、
平成30年2月末日までに、静岡音楽館倶楽部事務局へ退会届をご提出くだ
さい。ご提出のない場合は自動更新となりますので予めご了承ください。

静岡音楽館倶楽部 法人会員(2017年5月末現在)50名順

- | | |
|-------------------|-----------------|
| ●(株)アイテレテック | ●(株)戸田書店 |
| ●(株)SBSプロモーション | ●(有)丸吉事務機 |
| ●かわした歯科クリニック | ●(株)メディア・ミックス静岡 |
| ●(株)サンタモンコーポレーション | ●ジェイアール東海ホテルズ |
| ●(株)タミヤ | ●ホテルアソシア静岡 |

コンサートシリーズ2017-18

主 催 静岡音楽館AOI 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団

特別協賛 静岡信用金庫

協 賛 AIWA アイワ不動産 studio FORUM

ホテル センチュリー 静岡 ANSHINDO

支 援 平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

次のことを予めご了承の上、チケットをお求めください。
皆様のご理解・ご協力をお願いいたします。

- * 価格は税込です。
- * 都合により内容を変更する場合があります。
- * お客様のご都合によるチケット代の返金、座席の変更は致しかねます。
- * 場内での飲食、写真撮影、録音、録画は固く断ります。
- * 携帯電話、アラーム付時計等の使用はご遠慮ください。
- * 他のお客様の鑑賞の妨げとなる行為は固く断ります。
- * 静岡音楽館AOIは、施設の構造上、会場準備が整わない状態(開場時
間前)で、お客様を8階ホールへご案内することができないため、通常エレ
ベーターは7階止になっております。開場時間になるまで1階エレベーター
前か、7階ロビーでお待ちください(ただし、1階エレベーター前でお待ちいた
だいたお客様を優先してご案内いたします)。
- * 静岡音楽館AOIが主催するコンサート(一部を除く)では、未就学児は入場
いただけません。



事前予約(1週間前まで)・託児料：1人1,000円
すわん Tel./Fax.054-255-5377
(火～金 10:00～15:00)
e-mail：swan@xqj.biglobe.ne.jp
留守番電話の場合は、お名前・電話番号を録音してください。

JR静岡駅北口を出てすぐ左

至 浜松

至 東京

●静岡市美術館

●松坂屋

至 浜松

至 東京

●/バリエーション
JR静岡駅

●ホテル
センチュリー静岡

※ 当館専用の駐輪場・駐車場はありません。

CONCERT HALL SHIZUOKA

静岡音楽館 AOI

月曜日休館(ただし祝日開館、翌日休館) 9:00～21:30開館
〒420-0851 静岡市葵区黒金町1番地の9

お問合せ 054-251-2200

検索

ライナー・キュッヒル (ヴァイオリン) インタビュー

Rainer Küchler

8月にギターの福田進一さんとのデュオでご出演くださるライナー・キュッヒルさんにお話をうかがいました。

ヴァイオリンを始められたのは何歳のときでしょうか。また始めることになったきっかけも教えてください。

9歳の頃、地元オーケストラがやってきて、そこでの演奏を見て自分もヴァイオリンを弾きたいと思ったことがきっかけです。

これまでにギターと共演されたことはありますか？

10代の頃に友人と共演したことがあります。

ほかの弦楽器と比べてギターとの共演で大きく違うところはありますか？

ギターの音はヴァイオリンなどの弦楽器と比べると比較的小さい音量ですので、共演の際はギターの音とのバランスを考えながら弾いています。

福田進一さんと共演することになったきっかけは？

紹介してくださる人がいて、それが縁で共演することになりました。コンサートだけでなく、レコーディングも行ったんですよ。そのCDは7月に発売される予定です。

プログラムについて、聴きどころなど教えてください。

M.ジュリアーニの協奏風二重奏曲、M.d.ファリャのスペイン民謡組曲、P.サラサーテの《カルメン幻想曲》などを演奏しますが、特にカルメンはギターに相応しい曲ですので興味深いと思います。そして、デュオだけでなく、それぞれのソロも披露する予定です。

大変な親日家でいらっしゃいますね。日本でのお気に入りの場所や好きな食べ物など教えてください。

気に入っている場所は相撲の国技館です。もちろん相撲を見ます。

日本の食べ物は、たいていのものは大好きですので、一概にこれとすることができません。ただ、味の濃いものと内臓は苦手ですが……。

オフの日は何をなさっていますか。

スコアを見たり、ヴァイオリンの練習をしたり、時には散歩をしたりしています。

日本全国で演奏会をされていると思いますが、静岡にいらしたことはありますか。

ヤマハの本社に招かれたことがあります。美味しいものがある県という印象です。

浜名湖のウナギはもちろん、随分前になりますが、おいしいマグロが食べられるお寿司屋さんに、それを食べに行くためだけに連れて行ってもらいました。

また日本一のお茶の産地であることや、おいしいとろろが食べられるお店があると妻から聞いています。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサート・マスターを退任されましたね。長い期間在籍していたウィーン・フィルでの思い出などがありましたらきかせてください。

思い出は沢山ありすぎて一言では語りつくせませんが、第一コンサートマスターとして責任のある地位におりましたから、オペラやシンフォニーなどでオーケストラがよりよい音楽を創り上げるということを常に思いながら弾いていました。

ウィーン・フィルを退団されてから生活は変わりましたか？コンサートが増えたりしていらっしゃるのでしょうか？日常について教えてください。

ウィーンでの生活について申し上げますと、在任中に比べて、夜に比較的家にすることが多くなったということくらいです。ウィーンでの室内楽の演奏活動や大学でのレッスンは変わりありませんので、普段の生活は殆ど変わっていません。

この春からNHK交響楽団のゲスト・コンサートマスターに就任し、定期的に演奏会に出演したり、リサイタルや室内楽公演で日本に行く機会が多くなりました。オーストリア国内でも小さな演奏会がありますので行ったり来たりの生活です。

コンサートに向けて、お客様にメッセージをお願いします。

日本ではどのくらいの頻度でギターとヴァイオリンのデュオ・コンサートが行われているかは分かりませんが、もしかするとこの組み合わせの音楽を初めてお聴きになる方も多いかと思います。この機会に是非お楽しみいただければ幸いです。演奏会でお目にかかれますことを楽しみにしております。

お忙しい最中、合間を縫って答えてくださったキュッヒルさん。ウィーン・フィルを退団後もさらに精力的に活動されています。AOIでも素晴らしい演奏を聴かせてくださることでしょう。今からコンサートが待ち遠しいです。

聴き手： 関本淑乃 (静岡音楽館AOI 学芸員)



ライナー・キュッヒル&福田進一
ウィーンのサロン・コンサート

8/6 回

15:00 開演 (14:30 開場)
全指定 ¥4,000 (静岡音楽館倶楽部会員¥3,600)

曲 目
N.パガニーニ：協奏風ソナタ イ長調 MS.2
M.ジュリアーニ：協奏風二重奏曲 ホ短調 op.25
M.d.ファリャ：スペイン民謡組曲 (P.コハンスキー編／福田進一 改編)
P.サラサーテ：アンダルシアのロマンス
P.サラサーテ：カルメン幻想曲 op.25 (福田進一 改編) (ほか)

9月9日(土)、静岡音楽館AOIにご登壇いただく鈴木優人さん(作曲家、指揮者、ピアニスト、チェンバリスト、オルガニスト、プロデューサー)にお話を伺いました。

「鈴木優人の《四季》」と銘打っての演奏会ですが、どのようなプログラムでしょうか？
「四季」といえば、みなさんまず思い浮かぶ曲はヴィヴァルディの《四季》だと思います。今回は、ヴィヴァルディが生きたバロック時代の楽器を使って演奏いたします。この作品は、14行のソネット(詩)が曲中季節毎に割り当てられていますが、それをソプラノの松井亜希さんに朗読していただき、そのあと演奏するというスタイルで上演いたします。これが今回のコンサートのメインのプログラムとなります。
演奏は、「アンサンブル・ジェネシス」という私のグループ。バロックから現代、あるいはまだ生まれていない作品への架け橋になるということをテーマのひとつとしているアンサンブルです。モダン楽器とバロック楽器(例えばモダン・ヴァイオリンとバロック・ヴァイオリン)を両方演奏できるメンバーが集まっていて、その特性を生かした独特な「四季」のプログラムを前半に聴いていただくことになっております。まず冒頭は、チャイコフスキーの《四季》から(10月 秋の歌)を演奏いたします。9月の演奏会に「10月」を演奏することはどうかと思いましたが…。つづいてメンデルスゾーン、三善晃さん、石井眞木さん、レスピーギ、ベルリオースといったバラエティに富んだ、それぞれが「シーズン(季節)」のために書かれた作品を取り上げます。さらに前半の終りには、AOIから委嘱いただいた私の作品(題は未定)を初演いたします。

「アンサンブル・ジェネシス」についてもう少し詳しく教えてください。

2005年、私が24歳のときにヴァイオリンの山口幸恵さんとともに声を掛けて、14人のメンバーで結成しました。現在、メンバーは可変で基本的に弦楽器を主体としています。そこにソプラノの松井亜希さんと打楽器、鍵盤楽器が入り、レジデント・コンポーザーとして新垣隆さんがいるという構成です。
「ジェネシス」とは、旧約聖書の「創世期」という意味から、「事の始まり」ということを意識して名づけました。「始まり」に着眼して音を紡いでいくことをコンセプトとし、作曲家が音を生み出した瞬間に立ち返って演奏するということを意識しています。それぞれの時代に合わせたオリジナル楽器で、できる限り演奏しようとしています。バロックの曲を演奏する場合は、バロック・ヴァイオリンを使用するという具合に…。そのため、バロックと現代の作品をひとつの演奏会で両方演奏する場合は、メンバーそれぞれが古楽器とモダン楽器を両方使用するということになります。バロックを弾き、モダンを弾いて、ピッチも違うということになり、メンバーには「これができる人はそんなにいないよ。」と言われていました。
多様なスタイルをメンバー全員でともに勉強し、先入観にとらわれずに噛み砕いていく、ということをや若い時から共有した仲間たちですので、おそろ60歳になっても続けているグループだろうと、直感的に思っています。実際、細々と、しかし大胆に活動をしています。

ソプラノの松井亜希さんについてもお聞かせください。

松井さんは私の東京藝大時代の同級生で、とても信頼する歌手です。バッハ・コレギウム・ジャパンのソリストとしてもバッハを始めたくさんの作品を海外でも歌っているほか、ソルフェージュ能力にも恵まれたソプラノで、アンサンブル・ジェネシスにも常に参加してもらっています。
我々との結びつきを強く感じさせるエピソードとして、彼女が第一子を出産される時期に私たちとの演奏会を予定していましたが、かなりの早産となって演奏会の日に出産されたということがありました。《オルフェオ》の演奏会だったので、当然お子さんの名前は「オルフェオ」だよな、と冗談を言ったことを覚えています。彼女とは本当に長い付き合いです。

当館から委嘱させていただいた新作についてお伺いいたします。

今回の作品は、まずはアンサンブル・ジェネシスの編成を最大限に生かしたものにしようということで、弦楽器に加えてソプラノと打楽器が入る室内楽としては比較

的大きめな編成にする予定です。曲は、この演奏会で取り上げるヴィヴァルディから石井眞木さん、三善晃さんという流れの延長線上にある作品として位置付けたいと考えています。あわせて曲につける歌詞もいろいろと考えていて、「和歌」をひとつのテーマにしようと思っています。いまは4つのシーズンを網羅するか、「秋」のみをテーマとするかで迷っているところです。恐らく曲のタイトルは、題材とする「和歌」からとることになるでしょう。

ピアノ、チェンバロ、オルガンの演奏、オーケストラの指揮、演出・プロデューサーと様々な活動を全て第一線で活躍されていますが、大変ではありませんか？
肩書が長くて申し訳ないと思うことはよくあります(笑)。仮に2か月間、指揮しかないとおかしなことになるかもしれませんが、演奏と指揮を良いバランス、良い密度で携わることができているし、どの楽器を演奏する時であれ、作曲をするときであれ、自分が心から向き合いたいと思う音楽を仲間たちとともに作るということを最優先に考えたいと思っています。それぞれの場において自分が求められている役割が変化しているというだけで、私自身のスタンスや音楽観が変わるわけではないので、あまり大変ではありません。もちろん勉強をすることは大変ですね。今までもそうですが、それぞれの能力を伸ばしていきたいと思っていますので…。
どの楽器が特に楽しいということも無いです。指揮をしていて楽しいときもあるし、オルガンを弾いていて楽しいときもあります。ただ、作曲をしていて楽しいと思うことは減さないかな…。作曲は終わった瞬間が楽しいですね。

昨年、第一子をご誕生されたそうですね。おめでとうございます。

子育てって、こんなに大変なんだと実感しています。ピアノがとても好きで、ピアノの前に座らせるとバンバン叩きます。なかなかの現代的なサウンドで、偶然性の音楽が聴けて楽しんでいます。

最後に静岡の聴衆にメッセージをお願いいたします。

まずは、ヴィヴァルディの《四季》全曲を生で聴いていただきたいと思っています。ヴィヴァルディがどれだけ靈感に憑つかれて書いたにせよ、この300年の時を経てもお、瑞々しく様々な情景を描き出しています。音楽だけで「小川だな」、「小鳥だな」ということが判るだけでもすごい作品ですよ。この名曲を、ヴィヴァルディの時代で使われていた楽器の音色で聴いていただくということも、今回の演奏会の特徴だと思います。ぜひその点を楽しんでいただきたいと思います。
そして前半のアラカルト「四季」コーナーは、アンサンブル・ジェネシスの本領を発揮する、様々な作曲家の作品を軽やかに聴いていただきます。重厚な作曲家の名前が挙がっていますが、1曲ずつが短く、松花堂弁当のようにいろんな味の曲をちょっずつ味わっていただければと思っています。みなさまのご来場をお待ちしております。

聴き手： 竹内啓(静岡音楽館AOI 学芸員)

CONCERT コンサートレポート REPORT

ジャン＝ギアン・ケラスのチェロ、アレクサンドル・メルニコフのピアノ
ベートーヴェン「チェロ・ソナタ」全曲集(第1～5番)

2017年3月5日

池田卓夫(音楽ジャーナリスト)

長年のコラボがマンネリではなく、 絶え間ない即興の源泉に

9つの交響曲、5つのピアノ協奏曲、16の弦楽四重奏曲、10のヴァイオリン・ソナタ、32のピアノ・ソナタ……。ベートーヴェンを究めるのに、まとまった数の作品がある特定ジャンルを集中的に弾く、あるいは聴くのは有効だ。1人の作曲家の創作の軌跡を時系列でたどるにとどまらず、楽器や奏法の進歩、楽器と楽器の「力関係」の変化などが21世紀の現代より、ずうっとダイナミックに展開した時代を追体験できるからだ。

1796年の第1&2番から1815年の第5番まで、18～19世紀の節目をまたいで書き連ねられた5曲のチェロ・ソナタを1回の演奏会で、「まとめ聴き」できる意義は大きい。

静岡音楽館AOIでは2017年3月5日、フランス系カナダ人チェリストのジャン＝ギアン・ケラスとロシア人ピアニストのアレクサンドル・メルニコフによって、5曲と一気に触れる機会が実現した。2人にドイツ人ヴァイオリニストのイザベル・ファウストを交えたユニットはこれまでバッハ、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、シューマン、ブラームスらの室内楽、協奏曲の分野で共演を重ね、「ハルモニア・ムンディ・フランス」レーベルから数多くのCDを発表してきた。今回の5曲も13年に録音、14年には音楽之友社の「レコードアカデミー賞」を授かっており、定番のレパートリーといえる。

だが、軽くしなやかな音と歌い回しで耳を惹きつけるケラス、深く重厚な音と俊敏なタッチを兼ね備えたメルニコフの「会話」が始まった途端、ルーティンワークとは無縁の新鮮な空気が立ち上った。「作品5の1」がベートーヴェンの十分に若い時期の作品であることを実証するにとどまらず、後のさらに大きな展開を予感させるだけの「鮮度」を絶えず放ちながら、演奏は進む。

ある瞬間の音は、その音だけ屹立するのではなく、過去から現在、未来へと連なる時間軸の中に存在する。聴き手もまた、自由な時間旅行の感覚を演奏者と共有している。即興性に富むメルニコフのピアノは時に、とてつも



なく雄弁となり、初期の作品であることを忘れさせるほど巨大なスケールに到達するが、その衝撃感がまた、ベートーヴェンのテンペラメントと時空を超えて共鳴しているかのような趣を放つ。続く第2番の長大な第1楽章は、楽器の改良が劇的に進んだ時代の実験的な性格を備えている。メルニコフは一転、繊細極まりない弱音から音楽を立ち上げ、ケラスの魅力である軽やかな運動性、情熱の発露とごく自然に絡み合いながら、作曲家の筆致を克明にたどる。同一楽句の反復であっても、つねに時間の経過が意識され、2人の中から、新たなイマジネーションが泉のように湧き上がるから、全く飽きることがない。

5曲中最も有名な第3番ではチェロ、ピアノそれぞれに極めて靈感に満ちたフレーズが次々と与えられるが、ケラスとメルニコフは芝居がかった素ぶりを一切みせず、靈感が靈感としてストレートに、現代への聴き手へと伝わる。ピアノからチェロへと、ソロのフレーズが移る際のスピトピアノ(瞬間の弱音)に息をのみ、緊張の持続に目をみはる。

第4番では地殻変動の予感から巨大な爆発までの時間を抜かりなく描き、ケラスの息の長い歌が最大限に達する。2人のやりとりは一段と自在さを増し、第5番の奔流へと、なだれ込む。その第2楽章は、やりようによってはセンチメンタルに墮す危険があるが、2人はエモーションを歌の純度と深みに昇華させた。続く第3楽章にかけては「高貴」ともいえる世界が広がった。2人とも「作品の下に自らを置く」節度を守りつつ、5曲のソナタそれぞれの持ち味を極限まで引き出し、私たちに大きな喜びをもたらした。

アンコールは、ドビュッシーの「チェロ・ソナタ」から第1楽章。1915年の作品だが、第1次世界大戦で「壊れゆくヨーロッパ」を嘆き、18世紀前半のフランスで活躍したクーブランの音楽に思いをさせながら作曲した遺作。ベートーヴェンをめぐる時間旅行の軸をさらに拡張して、演奏会は幕を閉じた。



撮影：日置真光

鈴木優人の《四季》

9/9[土] 18:00 開演(17:30 開場)
全指定¥5,000(会員¥4,500、22歳以下¥1,000) [Pコード=310-133]

出演 鈴木優人(指揮、ピアノ、チェンバロ)、松井亜希(ソプラノ)、山口幸恵(チェロ・ヴァイオリン/コンサートマスター)
アンサンブル・ジェネシス

曲目 P.I.チャイコフスキー：《四季》op.37b より(10月 秋の歌)
F.メンデルスゾーン：《真夏の夜の夢》序曲 op.21(鈴木優人 編)
三善晃：四つの秋の歌
石井眞木：ピアノ曲・北・銀・夜(冬) op.93
O.レスピーギ：《ボツティチェリの3枚折絵》より《春》(鈴木優人 編)
H.ベルリオース：《夏の夜》op.7 より(鈴木優人 編)
鈴木優人：2017年度静岡音楽館AOI委嘱作品(世界初演)
A.ヴィヴァルディ：ヴァイオリン協奏曲集《四季》op.8-1～4
(春)ホ長調 RV.269、(夏)ト短調 RV.315、(秋)ヘ長調 RV.293、(冬)ヘ短調 RV.297

インタビュアー
鈴木優人

1940ーリヒャルト・シュトラウスの家ー

2017年4月29日

森岡実穂 (中央大学准教授)

CONCERT コンサートレポート REPORT

静岡「市」立の静岡音楽館AOI、静岡「県」立の舞台芸術センターSPAC、このように近接する「市」と「県」の施設両方が芸術監督のもと「創造する劇場」として活発な活動を続け、しかも協力して活動している例は全国でもあまり多くはないらしい。2015年には初共同制作作品として、AOI前芸術監督の間宮芳生作曲・SPAC現芸術総監督の宮城聡演出による《ポポイ》が発表された。その第二弾が、4月29日(土)に音楽館で上演された『1940ーリヒャルト・シュトラウスの家ー』である。宮城と、現在のAOI芸術監督である野平一郎の、「(AOIは)通常オペラをやる空間ではないからこそ、普通のオペラの粹踏みとは違ったものをつくりたい」「とある時代の全貌を一日の舞台をみるだけで感じられるようなものを」「(ブレトクの発言より)」という発想から、「1940」という年を核にした「演劇でも、オペラでもない」オリジナル脚本が、SPAC文芸部で演出家・劇作家・批評家でもある大岡淳によりつくられることになった。

物語は、橘正一(春日井一平)という青年による「観客への状況解説」から始まる。彼は、東京の外務大臣・有田八郎(奥野晃士)より、リヒャルト・シュトラウス(若宮羊市)のもとを訪れ《紀元2600年奉祝曲》の作曲を依頼し、これを受領する任務を命ぜられる。この架空の青年を核に、ヒトラーに心酔するドイツ大使大島浩(小長谷勝彦)ら枢軸派と有田外務大臣ら英米派の権力闘争、日本人エリートたちの西欧文化への愛と「文化外交」への野心、日独伊三国軍事同盟締結直前の世界の複雑な情勢、西欧列強と日本が共有する「反共」意識、シュトラウスの息子の妻アリーチェ(木内琴子)や孫の立場すら危うくなるような激化するドイツ国内のユダヤ人排斥、そしてシュトラウス自身の芸術の芸術的・政治的位置づけについての懊悩など、さまざまな要素が緊密に絡み合い、「1940」というあやうい時代の空気をびりびりと浮き上がらせる。

SPACでは2015年、16年に『メフィストと呼ばれた男』を上演し、高い評価を得ている。実際にナチス政権時代に閣僚の庇護を受け活動した国立劇場総監督が主人公であったこの作品は「舞台芸術への検閲・政治利用」という主題を正面から描いたものであった。『1940』には日本を絡めてこの主題を引き継ぐという面があり、宮城芸術総監督の下、あたりまえに芸術と政治について考える機会を提供していこうとするSPACの姿勢は素晴らしい。

この物語にさまざまな音楽が挟み込まれていくのだが、その選曲はまさに

20世紀前半の音楽界が内包する多様な方向性を、良質な室内楽の花束として提供するというAOIならではのものとなっている。当時の日中関係や消費文化を反映する〈蘇州夜曲〉、19世紀オペラ界の偉大な先達、ヴァーグナーとヴェルディのアリア〈夕星の歌〉〈さようなら、過ぎ去った日々よ〉、同時代にあってシュトラウス自身が進むことを止めた道を行ったシェーンベルクの6つのピアノ小品 op.19など。

音楽と演劇の融和という点でもっとも成功していたのは、シューベルト〈魔王〉のピアノ伴奏(中川俊郎)にのせてシュトラウスが妻や父、息子と語りあう夢をみる場面であろう。ここでは、子どもの死への不安と焦燥の音楽がシュトラウス自身の政治や音楽へのそれに重なり、豊かなイメージを喚起した。花岡詠二の生き生きとしたクラリネット演奏による〈私の青空〉は、老大家にジャズ演奏を贈る親米役人の傍若無人ぶりを際立たせた。一方で、妻屋秀和ら歌手達の歌はもっとと踏み込んだ形で芝居の内容に組み込まれてもよかったのでは。そして、技術的に難しくても字幕はほしい。佐々木典子の《4つの最後の歌》、特に〈9月〉後半のまさに死に向かうような緊張感、字幕で内容を理解しながら聴ければさらに観客の感動は増しただろう。次回作への意欲も語られていたので、その際にはぜひ検討を。

シュトラウスとアリーチェが退場していった後には、ナチスへの抵抗のシンボルである白ばらが残された。共に「いま」を考える場であろうとするふたつの劇場の問いかけは続く。



撮影：日置真光



第7回

アマチュア・アンサンブルの日♪ 11/3(金・祝)

12:00 開演(11:30 開場)※17:45 終演予定
無料(申込不要)

第1部

12:00 開演

アンサンブル・クリーク(トランペット、フルート、弦楽五重奏、チェンバロ)

J.S.バッハ：管弦楽組曲第2番 ロ短調 BWV1067

ファーニとその仲間たち(フルート、オーボエ、弦楽五重奏、チェンバロ)

J.C.バッハ：五重奏曲 ハ長調 op.11-1

アンサンブル・ヴァン・ルージュ(フルート、ヴァイオリン、チェロ、ピアノ)

W.A.モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番 ニ短調 K.466 第2、3楽章

アンサンぶる静岡(フルート、ヴィオラ、チェロ、ギター)

L.ボッケリーニ：ギター五重奏曲第4番 ニ長調 G.448 第1、3楽章

ラリレロ(弦楽合奏)

J.S.バッハ：2つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調 BWV1043 第1、2楽章

ムジカ ブリューム(弦楽合奏)

M.グリンカ：夜想曲〈別れ〉

G.F.ヘンデル：合奏協奏曲第3番 ホ短調 op.6-3, HWV321 第3楽章

P.マスカーニ：歌劇《カヴァレリア・ルスティカーナ》より 間奏曲

第2部

13:45 開演(予定)

富士宮 COTUPON Orchestra(サクソフォン、ピアノ)

N.アダレイ：ワークソング

ハルモニア クインテット(木管五重奏、ピアノ)

F.ブーランク：六重奏曲 第1、2楽章

アンサンブル とろ(トロンボーン三重奏)

成田勤：スターライト・ハイウェイ

Ensemble LIETO(サクソフォン四重奏)

F.et.M.ジャンジャン：サクソフォン四重奏曲

はんなりプラス(トランペット、ホルン、トロンボーン)

P.グレイアム：タイムピース

静岡県トロンボーン協会(トロンボーン七重奏)

G.F.ヘンデル：歌劇《セルセ》HWV7 より《私を泣かせてください》(A.オストランダー 編)

J.S.バッハ：モテット《主よ、私の喜びよ》BWV227 より(M.ハルペンソン 編)

V.E.ベッカー：マーチ

プラス・アンダンテ静岡(トランペット、ホルン、トロンボーン、テューバ)

J.S.バッハ：フーガの技法 BWV1080 より 第1、9曲(中川良平 編)

主よ、人の望みの喜びよ(BWV147)(青木淳 編)

アンケート
の声

〈これまでの「アマチュア・アンサンブルの日」にご来場くださった方々より〉

無料で生演奏を聞ける機会があるのはとても嬉しいです。

毎年楽しみに来させてもらっています。アマチュアの方々にプロ並みの演奏に驚かされます。

生音のひびきが素晴らしい。アマチュアの方々にこのホールでの演奏機会を作っていただく企画を今後とも継続してほしい。

本日のイベントは静岡のお宝を発見したような気持ちです。

色々なジャンルの音楽、合奏が楽しめてとても良かった。初めて目にする楽器もあり、興味深い演奏でした。次回もぜひ来たいです。

いろいろな楽器の音色が聴けて、大変楽しく過ごさせていただきました。普段聞けない楽器や、アマチュアならではのアンサンブル、今回、この企画ならではの大変良かったです。次回も楽しみにしています。

第3部

15:15 開演(予定)

アラウンド フィフティーズ(うた、ヴァイオリン、ピアノ)

J.S.バッハ：主よ、人の望みの喜びよ(BWV147)(山口景子 編)

G.カッチーニ：アヴェ・マリア(山口景子 編)

岡野貞一：故郷(山口景子 編)

amici(ピアノ、うた、サクソフォン、打楽器)

C.-M.シェーンベルク：ミュージカル《レ・ミゼラブル》より

篠笛アンサンブル フラウタ

朱鷺たたら：かがり田楽

わらべ歌《かぞえ唄》(尾原昭夫 編)

佐藤和哉：さくら色のワルツ

R.ラブランド：ユー・レイズ・ミー・アップ

中ボ連音楽隊(ハーモニカ、トランペット、ギター、ピアノ、打楽器、うた)

町田嘉章：ちやっきり節(大石喜久雄 編)

アンデス民謡《花祭り》(大石喜久雄 編)

F.レイ：男と女(大石喜久雄 編)

H.マツス・ロドリゲス：ラ・クンパルシータ(大石喜久雄 編)

大石喜久雄：ピンクのカーティガン

Duo Brise(ピアノ・デュオ)

E.シャブリエ：ロマンティックなワルツ第1番 ニ長調

The Pretty Dolls(うた、ピアノ・デュオ)

中田喜直：誰も知らない

P.I.チャイコフスキー：バレエ音楽《くるみ割り人形》より

〈行進曲〉〈あし笛の踊り〉〈花のワルツ〉

アニロ・グランデ(ギター二重奏)

Q.M.y.コルテス：シェリト・リンド

C.ペラスケス：ペサメ・ムーチョ

Z.アブレウ：ティコ・ティコ

りこばら。(リコーダー六重奏)

A.メンケン：ホール・ニュー・ワールド

W.A.モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク セレナード第13番 K.525 第1楽章

葉加瀬太郎：エトピリカ

富士リコーダーオーケストラ

J.パッヘルベル：カノン

W.A.モーツァルト：歌劇《魔笛》K.620 より

A.L.ウェバー：ミュージカル《オペラ座の怪人》より

ギターアンサンブル サウンド・オブ・ドリーム

J.S.バッハ：主よ、人の望みの喜びよ(BWV147)(J.スバークス 編)

I.イヴァノヴィチ：ドナウ河のさざ波(久保田尚男 編)

J.ブラームス：ハンガリー舞曲第5番(D.アデール 編)

フレンズ(マンドリン・ギター・アンサンブル)

C.フランソワ：マイ・ウェイ

A.W.ケテルビー：エジプトの秘境にて(S.バニエリ 編)

